

高校生の断定回避表現 —「話し合い」の談話を中心に—

小林 美恵子

1 はじめに

我々は自己の判断や主張を他者に伝えようとするとき、相手や同席する第三者がその伝達内容やそれを伝えようとする話者自身をどのように感じ、評価するかに配慮し、伝達内容の他に、それがなるべく相手に受容されやすいように働かささまざまな言語要素を加えて表現する。ことに日本語の場合、それらの言語要素はこちらの判断や主張を効率的、論理的また強圧的に相手に伝えるというよりは、多少まわりくどくても、自分が相手や話の行われる場をいかに尊重しているかをアピールし、またそのことによって自分が「わがまま」な主張をしているのではないことをアピールして、相手の好感を得、伝達を進めようという方向に用いられることが多い。例えば現代語における敬語はそのような意識の最もよく現れた言語形式の一つであると言えよう。杉戸(1996)で相手への「構え」と規定された、いわゆるメタ言語行動や、言いよどみ、言いさし、また「あの」「まあ」「えーと」などのいわゆる空白補充語などにもこのような働きを見ることができる。

佐竹(1995)は若者の話しことばのレトリックとして①～じゃないですか。②～とか…③～みたいな…④～だし…⑤～たりして…⑥～のほう⑦意外と…⑧けっこう…⑨(半クエスションの使用)を例にあげ、これらが断定や明言を避けて表現をぼかす(やわらげる)性質を持っているとし、さらにこれらは「聞き手との相違点を乗り越え、意見の一致を図り、協調を求めて断定を避ける」というよりは、自分の意見への自信のなさから、発言・意見の不確かさ、不十分さが明白になることを恐れて、自分の意見の正当性や妥当性を示しつつ、同時に発言が強すぎて聞き手に反発されることのないように断

定を避ける戦略的用法であるとし、このような用法を「ソフト化」と名付ける。

敬語を使って相手との距離をとったり、断定を回避することにより表現をやらげるといふ用法自体は日本語が従来持つものであるが、若者たちがそれを多用することをストラテジーとして自分が傷つかないように他者との関係を位置づけている、というのはきわめて現代的な一現象といえるのかもしれない。

2 高校生の「話し合い」に見られるソフト化

さて小論では高校生が実際に行った「話し合い」での自然談話によって、このようなソフト化—断定回避や自己防衛的な表現—がどのような言語形式によって行われているかを確かめる。資料として用いたのは東京都多摩地区の都立高校1、2年生13人の男女が文化祭のフィナーレの意義や内容について話し合っている約30分184発話を録音・文字化したものである。この話し合いは各ホームルームの代表が集まるリーダー研修会の中で行われたもので、参加者はそれぞれ面識はあるが、必ずしも親しい友人どうしというわけではない。

次にその話し合いの一部を紹介する。発話に附した各種の下線及び文末のマークは後に整理する①～⑩の言語形式に対応するものである。

1 男 a / 32 個人個人で楽しいものじゃなくて、っと、クラスみんなで楽しめる、そういうものを考えてけば、いいんじゃないですか。

1 男 b / 33 えっと、そういう具体的なものを決めてくんじゃなくて、再認識とかを作ったらいいんじゃないですか。 / どうせだったら。
(/ は倒置文であることを示す)

34 だから一年生だったら一年生で、まずそういうのをいきなりさっきも言った、**ですけど、なにをやったらいいかっていう場合**勝手に出てきちゃって、みんなわかるわけじゃないですか。

35 だからそういうところで、そういう公約とかそういうものがあるとしたら、そういうものに対する認識ってえのを強めていけば、あとあとんなってから、それは成果として出て来るんじゃないで

すか。

36 だから、そういうものを決めるよりも、まず、生徒として、生徒のそういう認識みたいなものをずっとそうやって作っとかないとそのものを成功しないと思います。

2女c / 37 ひとつゆっていいですか。

38 それ認識を作るっていうのは具体的にだからどのようなことになってどう具体的に、あ、具体的にっていうか、それがわからないと、その認識を作るっていうのを、そのなについてっていうのがあなたの場合明確になってないし、認識を作るっていうのがどういう役割を果たすかっていうのにも、ついても全然触れてないんでそのへんをはっきりさせて欲しいんですけど。》

1男b / 39 発言が***。>

40 例えば具体的っていうのじゃないんですけどね、例としてあげましたらね、例えば、こっちのほうで一応説明をしつつ、文化祭の、文化祭にかかわるとかそういうな総方針みたいなものをなんとか。》

2女d / 41 すいません。

1男b / 42 はい。

2女d / 43 もうちょっと大きい声でお願いします。

1男b / 44 風邪気味だから声かでないで。》

45 で、だから例えば、そういうの総方針みたいな形で、そういうものを具体的じゃなくてもいいですから、漠然としたものを生徒にもわかるようなもので、例えば一年生の場合ですよ、そういうのがわかるようなかたちをとったね、とっけば、ま、その認識ってものをね、ものをなんか、でて、そうゆう、あ、じゃなくて、生徒一人一人がわかってくれる、例えば、こっちで、例えばこういうふうなものをやるけどわかってくださいとか、そういうようなこといったって、んで、わかってくれる人はほんの少数じゃないですか。

46 そういうんじゃなくて、なんですか、なんか話しがわかんなく

なってきた。

- 47 だから、その、認識みたいなものに目覚めてくれれば、やっぱり、なんですか、こちからも積極的にそういうものを、広めてね、そういう意味合いを持たせていくことが必要なんであって、認識を高めるプラスそういうものの意義ってものをはっきりさせていくってわけじゃないですか。

(間)

2女d / 48 委員長からありますか。 / 今の意見に。

2女e / 49 いいですか。

- 50 あの わたしもあの一、今言ってくれたのとほとんどけっこう 似たような意見なんですけど、やっぱりこちらから、あのなんでそのフィナーレをやるかとかさあ、あの内容的なものを全部含めて一、やっぱりもっと教えていかないと、やっぱり、盛り上がらないっていうか、生徒としては、やっぱりあの一、わからないと思うから、活動してることとか、考えてることとかをもっと言ってやっぱり認識してもらうっていうか、そういうふうに、やってかないと盛り上がりません。

2女c / 51 っていうか、アピールしてるんですよ。

52 れっきとした機関紙として文化祭便りがありますよね。

53 あれ一って、今文化祭のことについては2、3触れてると思うんですけど。》

2女d / 54 まずフィナーレのことについて***。>

2女c / 55 あ一あの、フィナーレのことについて、うん、そういう認識を、ま、それにふれて、まあ、具体的な内容っていうふうになっちゃうけど、まあ認識がないのに、そういう具体的な内容を決めるのはおかしいっていう意見がでましたけど一、でもやっぱり、その認識っていうのがどこから生まれてくるかっていうとやっぱり、具体的な内容を知った上でっていうような、だとわたしは思うんですね。

56 で、そしたらやっぱり、まあ、アンケート取ると。》

57 (笑)

- (注)
- ・***は聞き取り不能部分。*の数は発話の長さに応じる。
 - ・各発話の頭の数字は資料全体における発話番号を示す。発話単位については、話者が交代する前までと、「だ」「です」「ます」や終助詞などで文が完結するところで切り、1発話として教えた。
 - ・1男a・・・1年男子話者a 2女c・・・2年女子話者c 以下同様。
 - ・2女dが司会者。48に「委員長」との呼びかけがあるが、文化祭委員長の発話はここにはない。2女cは実行委員会の中枢として文化祭にかかわっている生徒である。

次に資料に特徴的に見られる言語形式を、文末、文中それぞれについてあげ、説明する。

2-1 おもに文末に見られる言語形式

①～じゃない(ですか)。

②(言いさし)》 (語尾の不明)〈

①「～じゃないですか」は佐竹(1995)小矢野(1996)などで最近のテレビのトーク番組などで若者によく使われる言い方とされる。佐竹によれば、元来は発言内容が一般的に成り立つことについて聞き手の同意を求める形式だが、現代の若者用法では必ずしも聞き手に同意を求めるために使われるのではなく、単なる表現のやわらげとして使われる傾向が認められるという。さらに聞き手の知らない、自分自身のことについて用いられる新用法もあると報告される。ここでは新用法は特に見られないが、聞き手の返事の有無にかかわらず「～と思います。」にかわるような形でたたみかけるように繰り返されており、同意を求めるというよりは断定を回避するために使われている。なおこの形式は話者1男bに多用されているが、全体でも使用しているのは1年生の男女のみで、ややあらたまった形式として、また同意は求めないが

疑問形として投げかけることで判断を聞き手に委ねる意図によって用いられているようだ。2年生の場合は

2女114・・・やっぱりクラスの協力があってできるようなものっていう、そういうレクリエーションみたいなものがあるのもいいんじゃないかと思います。

2女157・・・意識調査みたいなものをするのもいいんじゃないかと。》
のように使われ「～じゃないですか」という言い方は1例もない。ただしこの場合も「である」という断定をさけ「じゃない」という打ち消しにすることによって聞き手に対する主張がやわらげられていると言える。

②にあげた、文として完結しないいわゆる言いさしの形の発話もきわめて多い。(資料中に)で指示)

特に2女c53に見られる「～ですけど」は後に「あなたはどう思いますか」が省略される形で、相手に判断を委ねているもので、言いさしの全発話43例中11例と目立っている。また語尾のピッチを下げ、文末を聞き取れないほどに濁す発話も比較的多く、(資料中*) これらも表現をやわらげる意図によって用いられているといえよう。文末にはその他に「でしょ」「よね」などの同意を求める言い方も比較的多く用いられている。

なお、46のような独話混じりの部分、委員会中枢の親しい2年生どうしのいくつかの発話部分を除き、語調は基本的に「です」「ます」「ですか」「ますか」などで、後の表にもみるとおり、小林(1995)で調査した高校生の雑談などと比較してもきわめて丁寧である。

2-2 おもに文頭・文中などに見られる形式

③ そういう その それ

④ ～っていう (か)

⑤ ～とか ～みたいな

⑥ やっぱり

⑦ だから

⑧ ～のだ(です) ～わけだ(です)

⑨なんか なんですか

⑩あの えーと まあ など

③④⑤はいずれも断定を避けて表現をぼかす役割をしている。

③「そういう」の使い方として特徴的なのは、32のように、「クラスみんなで楽しめるものを考えてけば…」といわずに、「楽しめる、そういうもの」と、いったん言い替えるものである。これに加えて前に出てきたものを指示する一般的な用法を繰り返す1男b33~36のような例もあり、この場合多発する「そういう」で指示される対象は同一のものばかりではないから、結局「そういう」の多発が文脈を見えにくくしている。1男bは特に、「そういう」を言葉癖のように多発する傾向があるが、2女c55など他の話者にもよく見られる。この55に現れる「そういう認識をま、それに触れて」の「それ」なども同様の働きをしていると言える。

④「～っていうか」も自分の判断や主張をわざわざ引用形式に言い替えて、その判断・主張があたかも自分自身のものではないかのように、いったん距離を置き、断定をやわらげている。「～っていう」という形での引用の繰り返しも、引用されている内容は自身の判断・主張とは限らないが、この形式を用いることによって表現をやわらげる意図があるのであろう。⑤「～とか」「～みたいな(の)」もほぼおなじような働きをしている。これらは40「文化祭にかかわるとかそういうな方針みたいのをなんとか》」のように重ねて用いられることも多い。

⑥⑦⑧は自分の主張の正当性・妥当性を示している。

⑥「やっぱり」は「さまざまな経過をたどり、いろいろ考えたりやってみたが、けっきょく前と同じ結果(結論)になる」というニュアンスを持つ。

⑦「だから」は後に続く結果や判断には理由や原因があることを示す。また

⑧「～のだ」「～わけだ」も、ともに事態に対する事情、背景の説明を述べる形式である。いずれも「今自分がここで述べることは単なるわがままではなく、妥当な論拠がある」と言っているわけである。ただし論拠としての経過・理由・原因・事情・背景などは具体的には示されないことのほうが多い。すなわち「妥当な論拠がある」ことよりは「単なるわがままではない」こと

を示しているわけだ。その意味でこれらは主張の断定をやわらげる働きをしていることにもなる。

⑨⑩はいわゆる「空白補充語」で、発話の最初に使われて順番取りの機能を持つほか、発話中では「ぼかし」表現として次にくる表現をやわらげる働きを持つとされる。内田（1993）では「ぼかし」としての「あの」「まあ」「なんか」をとりあげ、「あの」「まあ」は講演や会議などでまとまった談話を生産する場面で多く使われ、「なんか」はカジュアルな日常会話で用いられるとする。また、「あの」「まあ」は女性より男性が多く用い、「なんか」は女性のほうが多く用いるとの調査結果を報告している。しかしこれらについてはいずれも高校生の話し合いにおいてはあてはまらないようだ。小論では、資料や発話者が限定されていることから、男女差については特に調査しなかったが、「なんか」は男女・学年に限らず使用されており、「あの」「まあ」は2年生の女子によって多く使用されている。この話し合いの場で全体の流れをリードしているのが2年生の女子であることや、このような会議に対する経験が1年生男子より多いことが、講演や談話などで多用され、女性よりは男性に用いられるとされる形式が2年生女子によって多用されることの原因となっているのであろうか。となると、このような空白補充語の選択は性差によるものではなく、立場によるものであるということになるだろう。

なおこの他に前述のとおりメタ言語行動といわれるもの（例文中二重下線部）もソフト化の一形式と考えられるが、小論では紙数の制約もあり、深くは触れない。

3 高校生の雑談・成人の会議資料との比較

さて、高校生の話し合いの発話においてソフト化といわれるストラテジーがきわめて多く用いられていることを資料によって確認した。これは限られた一つの場の資料であるが、性別・学年を越えたすべての参加者がほぼ同じような傾向を示してるので、高校生の話し合いの一つのモデルとみて差し支えないと考える。なお、高校生における「話し合い」は互いの異なる意見を

論理的に相手に説明し反論や賛意を出し合っている結論に達するという意味で、談話の種別としては成人の「会議」に近いものと言えよう。そこで、以後この話し合いの資料を「雑談」と対比させる意味もあり「会議」と呼ぶことにする。

高校生の会議に見られたソフト化は高校生の雑談や、成人の談話においても同じように見られるものだろうか。先にあげた①～⑩の言語形式について他の資料と比較してみた。(表)

対照資料としては、小林(1994・1995)で分析した女子高校生6人の昼休みの雑談資料および、現代日本語研究会(1994)で文字化した次の4つの成人資料を用いた。

- [H A 1] 40代女性編集者と男性執筆者の執筆打ち合わせ会議の談話。約10分145発話
- [H A 2] 出版社編集部員の休憩時間の男女同僚の雑談。約10分215発話
- [H I 1] 30代～50代の男6人女2人の高校教員の学年会議。約10分240発話
- [H I 2] 高校教科研究室において始業前に男女の教員が雑談・打ち合わせをしている談話。約10分301発話

(表) 談話に見られるソフト化の言語形式

	高校会議	高校雑談	[HA1] 会議	[HA2] 休憩	[HA1] 会議	[HI2] 始業前	備考	
発話数/ 談話時間	184/30分	423/16分	145/10分	215/10分	240/10分	301/10分		
発話文節数	2168	1186	860	941	735	874	(間)については切る。縮約形については切らない。	
1発話の長さ平均	11.78	2.80	5.93	4.38	3.06	2.90	文節数/発話数	
です・ます文体数	69 (37.50)	3 (0.71)	56 (38.62)	20 (9.30)	44 (18.32)	32 (10.63)	()内/発話数% ①②も同じ	
①じゃないですか	10 (5.43)	17(4.02) 「じゃん」 のみ	4 (2.76)	7 (3.26)	4 (1.67)	6 (1.99)	じゃないかと・じゃないよね・じゃん等を含む	
②言いさし文	43 (23.37)	64 (15.13)	46 (31.72)	53 (24.65)	48 (20.00)	70 (23.26)		
③そういう(の)	69 (3.18)	2 (0.17)	7 (0.81)	3 (0.32)	3 (0.41)	6 (0.69)	そのよう・そこらへん等()内/ 文節数% ④~⑩も同じ	
④～っていう(か) ～という(か)	54 (2.49)	2 (0.17)	9 (1.05)	11 (1.17)	3 (0.41)	5 (0.57)	単純な引用は除く	
⑤	～とか	31 (1.43)	26 (2.19)	2 (0.23)	5 (0.53)	1 (0.14)	0 (0.00)	並列は除く
	～みたいなの (の)	20 (0.92)	1 (0.08)	1 (0.12)	2 (0.21)	0 (0.00)	0 (0.00)	「～みたいに～する」 のような例は除く
⑥やっぱり	34 (1.57)	1 (0.08)	2 (0.23)	7 (0.74)	0 (0.00)	0 (0.00)	やっぱし・やっぱ・ やはり等を含む	
⑦だから	18 (0.83)	0 (0.00)	1 (0.12)	2 (0.21)	0 (0.00)	1 (0.11)		
⑧～のだ(で) ～わけだ(で)	53 (2.44)	23 (1.94)	15 (1.74)	21 (2.23)	15 (2.04)	25 (2.86)	「んだ」「んで」 を含む	
⑨なんか なんですか	38 (1.75)	14 (1.18)	4 (0.47)	14 (1.49)	6 (0.82)	5 (0.57)	疑問詞の例は除く 「なんというか」含む	
⑩空白補充語	65 (3.00)	4 (0.34)	89 (10.35)	30 (3.19)	21 (2.86)	15 (1.72)	あの・その・えー・ えーと・まあ等	
①~⑩合計	435 (20.06)	154 (12.98)	180 (20.93)	155 (16.47)	101 (13.74)	133 (15.22)	()内ソフト化 合計/文節数%	
空白補充を除いた ①~⑩合計	370 (17.07)	150 (12.65)	91 (10.58)	125 (13.28)	80 (10.88)	118 (13.50)		

(表) より次のようなことがわかる。

・高校生の会議の一発話の長さは他と比較してきわめて長い。また発話の長さ、発話中に占める「です・ます」調の文の量、空白補充語の量、またソフト化をもたらす形式の出現などは、高校生の会議と成人 [HA 1] に多く、また [HA] と [HI] を比べた場合には [HA] がより多い傾向にある。殊に会議については [HA] [HI] の差が大きい。これは次にのべる「です・ます」体と同じく、会議がどのような人によって構成されているかによると考えられる。

・「です・ます」文体は、社外の執筆者と編集者の打ち合わせである [HA 1] がことに多く、高校生の会議がこれにつぐ。高校生の雑談では「でしょ」形式 3 例にとどまる。日常同じ学年担任として接することの多い者ばかりの会議 [HI 1] でも比較的少なく、会議か雑談かという談話の種類に加えて、どのような人々の集まりかということが決定に影響に及ぼしていると考えられる。

・高校生の会議においては③④のような言い替えや⑤のようなぼかしの表現による断定の回避の出現率が他の談話に比べて高い。発言の内容を「そういう」や「っていうか」などで言いかえていくことが発話を長くしていることも考えられる。高校雑談においては⑤の「とか」の出現率が際だっており、「とか」語などとよく言われる若者言葉の特徴が会議にも雑談にも現れていることがわかる。これはまた、佐竹 (1996) の報告とも一致している。

・自分の主張の妥当性を示す⑥⑦についても [HA 2] に「やっぱり」がやや目立つ以外は高校生の会議に際だっている。ただ⑧断定形式の「のだ」「んだ」などの多用は必ずしも高校生の特徴とは言えないことがわかった。

・空白補充語「あの」「まあ」などについては [HA 1] に際だっており、ソフト化のほぼ半分はこれが担っている。このため [HA 1] のソフト化形式の出現率は高校生を超えているが、これらの空白補充語を除いて考えると、[HA 1] [HI 1] のソフト化率はともに10%強、雑談については13%強で、これが成人談話の平均的なソフト化の程度とも言えそうだ。成人の場合 [HA] [HI] とともに会議より雑談においてソフト化が多くなされる。

しかし高校生の場合、雑談のソフト化は成人の雑談のそれと比較的近い数値だが、会議においてはソフト化の出現率がきわめて高いことが注目される。なお、高校生の場合「あの」や「まあ」も使わないわけではないが、成人と比較するとむしろ「なんか」の出現が目立つ。[HA]では「なんか」は会議より雑談で多用されるが、高校生の場合はこのような談話の種類による出現率の特徴はほとんど見られない。

4 まとめ

自分の発言が「単なるわがまま」でない妥当なものであることを主張し、しかし同時に聞き手に反発されないように断定を回避するという、この若者のソフト化は、高校生の会議において、成人の談話と比較しても多用されていることがわかった。成人とは逆に雑談よりも会議の場で自分の発言の「言い回し」に気を使ってソフト化の形式を多用するのも高校生の特徴である。例示した部分を分析的に見ていくと指示語のさすものが不明確であったり、主張が引用形式やぼかして曖昧にされたりで、結果として論点がはっきりしないことも多い。このような発話が互に通じ合うものだろうかという疑問も禁じえないが、実際には互いに共通の構えを持っているということだろうか、話し合いの参加者間ではさしたる問題もなく意志の疎通をしているようなのが興味深い。

そればかりでなく、話し合いの場に参加してみると、このような断定回避の多用にもかかわらず、むしろストレートな相手攻撃が行われている印象を受けることさえある。たとえば2女d41・43とそれに答える1男b44のような場合成人であれば、このようなストレートな要求と回答はしないのではないだろうか。「すみません、ちょっと聞こえないのですが…」とか「申し訳ありません。風邪気味で」などのように聞こえないことを自分の側の問題として言い、また謝罪のことばとともに言い訳をするというような配慮はここには見られない。このような、議題に関わる発話の内容については断定を回避しソフトに、しかし発話態度などについてはストレートにという傾向は談話全体に見られるようにも感じる。話し合いでは互いが異なった意見を主張し、相手

を論破すべきだという観念がこのあたりに現れているのかもしれない、メタ言語行動のありかたとしても興味深い。

成人し、社会人としてさまざまな話し合いの場に参加していくことにより、このような話しぶりには当然変化も見られるだろうし、よりよい討論の話し法などの教育も必要だと思われるが、それらについては稿を改めて論じたい。

参考・引用文献

- ・杉戸 清樹（1996） 「メタ言語行動の視野－言語行動の『構え』を探る視点」『日本語学』10月号 明治書院
- ・内田 伸子（1993） 「会話行動に見られる性差」『日本語学』5月特集号 明治書院
- ・佐竹 秀雄（1995） 「若者ことばとレトリック」『日本語学』11月号 明治書院
- ・小矢野哲夫（1996） 「テレビと若者ことば」『日本語学』9月号 明治書院
- ・小林美恵子（1994） 「事例研究・女子高校生の雑談」『ことば』15号
- ・小林美恵子（1995） 「文末形式に見る女子高校生の会話管理」『ことば』16号
- ・現代日本語研究会（1994） 『職場における女性の話しことば』